2024/02/07　　聖書研究会

聖書個所：コリントの信徒への手紙一 4 章 1～5 節

〇コリントの信徒への手紙一の 3 章で展開された宣教者論は以下の通り。

・宣教者とは何者でもない。重要なのは神様であり、宣教者とはこの神様に仕え、神様のために力を合わせて働く者。教会という『神の畑、神の建物』のために働いていく者。

・自分(パウロ)は福音という種を植え、アポロはそこに「水を注」ぐ役割を果たした。「しかし、成長させてくださったのは神」である。教会共同体は神の畑であり、宣教者はこの神様のもとで立場と役割を与えられて働く存在。

・また、自分(パウロ)はコリントの町の教会にイエス・キリストという土台を据えた。宣教者というのはこの土台に人々の信仰という家を建てていくのであり、これが宣教者の責任に他ならない。

〇こうした宣教者論をわきまえて、誰も「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して」、人間の小賢しい知恵を誇りとし、自らのエゴを土台に教会を建てることなどしないように、また終わりの日の裁きにも耐えうるような教会形成をし、そして福音宣教者を人間賛美するのではなく、キリスト、また彼らを用い、生き生きと働かれる神様御自身に目を向けて、すべての賛美と感謝を神様に献げるようにパウロは勧めを行った。

〇4 章では、3 章のこうした宣教者論を踏まえて、福音宣教者としての自分および同労者が、「キリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者」として、唯一の有効な裁きである神の裁きの前にのみ立ち、他の一切の人間の判断には左右されないことを断言する(1～5 節)。しかし、実際のコリント教会の状況はどうだろうか。パウロはこれを厳しく指摘し(6～13 節)、「こんなことを書くのは、あなたがたに恥をかかせるためではなく、愛する自分の子供として諭すためなのです」、「わたしに倣う者になりなさい」と、教会が本来あるべき姿に立ち帰るように、感情的とも思える言葉でコリント教会の人々を懸命に諭していく。

【注解】

○「こういうわけですから、人はわたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考えるべきです。」(1 節)

・「こういうわけですから」と、パウロは 3 章で自分が展開した福音宣教者の立場をコリント教会の人々が認めて、「わたしたちをキリストに仕える者、神の秘められた計画をゆだねられた管理者と考える」よう要求する。

・「キリストに仕える者」

「仕える者」＝㊀「ヒュペーレテース」

＝元来三段になった大きな船の一番下で櫓を漕ぐ者を指す言葉だったが、一般に他の者に仕える者を意味するようになった。

→福音宣教者は「キリストに仕える者」として、キリストの主権、支配、意志を中心に、教会を自らの好みで支配するのではなく、ただキリストの御旨を行うという観点で一番下に立って神に、また人に仕えて教会を管理する存在。

・「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」

「神の秘められた計画」＝「神の奥義」

＝福音の中に啓示された、イエス・キリストの十字架と復活を中心とする神様の救いの御計画

「管理者」→主人の所有、仕事を任された者

→福音宣教者は神様の救いの御計画を宣べ伝えていく仕事を委ねられた者であり、主人である神に果たすべき責任(みことばと聖礼典を通して福音宣教と教会形成を実現していくこと)を負っている。

・パウロはコリント教会の人々に、自分たちをこういう存在として捉えるように要求する。

○「この場合、管理者に要求されるのは忠実であることです。」(2 節)

・パウロたち福音宣教者が「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」であることは既に述べられたが、その「管理者」にとって最も必要なことがここで提示される。それは「忠実であること」に他ならない。

cf. ルカによる福音書 12：35～48

→忠実で思慮深い管理人は主人の心を知り、目を覚ました状態で主人の意図を実行する。

ペトロの手紙一 4：10

「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」

→単に使徒たち、福音宣教者たちだけでなく、すべてのキリスト者が神から賜物を与えられており、その賜物を用いて互いに仕え合う善い管理者となるべき存在。

・さて問題は、誰によって「忠実である」と判断されるかであり、パウロは 3 節以下でこの点を明らかにしていく。

○「わたしにとっては、あなたがたから裁かれようと、人間の法廷で裁かれようと、少しも問題ではありません。わたしは、自分で自分を裁くことすらしません。自分にはやましいところはないが、それでわたしが義とされているわけではありません。わたしを裁くのは主なのです。」（3～4 節）

・パウロが「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」として「忠実」であるかどうか、最終的に判断を下すのは、コリント教会の人々では決してない。実際はこの時、コリント教会のある人々がパウロをほめたりけなしたりして裁くようなことをしていたわけだが、それは決定的な意味を持つものではない。そればかりでなく、「人間の法廷で裁かれようと、少しも問題では」ないとパウロは言う。

・「人間の法廷」→原意は「人間の日」で、人間の裁く日という意味から裁判そのものを指す。

・最終的に判断するのは主であるから、パウロにとって主に先立って判断することは誤り以外の何ものでもなかった。人間の判断は、それがどのように真剣に断固として為されようと、何の意味もない。最後の裁きの日、主が来られる時にあらゆる秘密、人間の心の中の思いがすべて明らかにされ、使徒としてのパウロの働きも明らかにされるとパウロは考えている。

・このような考えから、パウロは「自分で自分を裁くことすらし」ない。パウロは自分で「自分にはやましいところはない」と考えているが、それで自分が義とされるわけではない。そんな自己義認がパウロの信仰義認では決してないのである。あくまでも裁くの

は主であり給う。判断の主体は人間には全くない。パウロは自分の良心にも絶対的な判断の基準を置かない。彼にとってどこまでも問題となるのは神の法廷であり、すべてを見通される神のまなざしである。主キリスト御自身こそ、すべてのしもべたちに奉仕を求め、それを評価する権威を持たれる唯一の方であられる。

○「ですから、主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。」(5 節)

・このようにして今現にコリント教会の一部の人々がしていること、すなわち自分たちの物差しで福音宣教者を判断し続けることをパウロは戒める。

・このパウロの戒めは、「主が来られ」、最後の裁きをなさる確かな事実に対する確信に基づいている。最後の裁きにおいては、人間の裁きのように不十分な部分的資料で判断が為されるのではなく、「闇の中に隠されている秘密を」も明るみに出し、「人の心の企て」、その善悪すべてが明らかにされたうえで、神から各人に対する称賛が届くのである。

・こうして主に先走って人を裁くのが誤りであることが徹底して説明される。

【今回の聖書個所から思うこと】

○私たちもまた一人ひとり宣教者であるわけだが、「神の秘められた計画をゆだねられた管理者」としてふさわしい働きができているかと言えば、何とも心もとない思いが拭えない。その判断は神が為さるものだとしても、主が「闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされ」る方であれば、ますます心もとなく思えてくる。しかし、そこで思い出したいのが、イエス・キリストの十字架の恵みである。主イエス・キリストは最後の裁きにおいて、私たちのすべてを見通される方であられると同時に、その十字架の御業で私たちを弁護される方でもあられる。今回の聖書個所の５節でパウロは、「そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります」と断言しているが、そこには「イエス・キリストのこの弁護のゆえに」というニュアンスも含まれているのだろう。自己判断による自分の評価、他人の評価を慎みつつも、このイエス・キリストの愛を励みに日々の宣教者としての務めに励んでいきたいと願う。